

平成 28 年熊本地震に関する熊本大学等との大学間連携に関する意見交換および日本防災士会の現地対応状況などに関する調査を実施しました(2016/6/11-12)

テーマ：平成 28 年熊本地震、大学間協力、現地支援団体

場所：熊本大学黒髪キャンパス（熊本県熊本市中央区）、日本防災士会熊本地震現地支援本部（熊本県上益城郡益城町）、熊本県上益城郡益城町、熊本県阿蘇郡南阿蘇村、熊本県阿蘇郡西原村

2016 年 6 月 11 日(土)から 12 日(日)にかけて、災害科学国際研究所の今村文彦所長、保田真理助手（ともに災害リスク研究部門 津波工学研究分野）、林晃大助手（寄附研究部門）が熊本県に入り、①熊本大学教員と熊本大学・東北大学間等の今後の連携や支援について意見交換
②日本防災士会熊本県支部幹部と益城町における対応状況についてヒアリング・意見交換
③益城町・南阿蘇村・西原村での被災状況の調査、以上 3 点を実施しました。

11 日午後は熊本大学黒髪キャンパスにて、まず熊本大学発生医学研究所の小椋光教授・熊本大学大学院先端機構（リーディングプログラム）の梅田香穂子特任助教と、熊本での市民公開講座の開催に向けて、東日本大震災から 1・3・6 ヶ月後に東北大学として市民公開講座を開催した時の様子や東北大学の教員を講師として派遣することを話しました。また、東北大学および熊本大学の両リーディングプログラム間での学生交流に向けて、インターンシップやワークショップを活用することを協議しました。続けて、熊本大学大学院自然科学研究科・減災型社会システム実践研究教育センターの松田泰治教授・藤見俊夫准教授と、熊本地震からの復旧・復興に向けたリーダー育成、アーカイブ活動の重要性および今後の活断層による地震に対するレジリエンス社会の構築に向けた研究開発成果実装支援プログラムへの申請について協議を行いました。

その後、益城町の日本防災士会熊本地震現地調査対応本部に伺い、日本防災士会熊本県支部長の宮下正一氏と理事の坂田峰憲氏へのヒアリングを通じて、普段からの備えや応急対応や復旧作業における専門ボランティアの重要性、防災士会のネットワークによりスムーズな現地支援対応を実施できたといった経験及び知見を得ることができました。

12 日は益城町・南阿蘇村・西原村にて、地表地震断層箇所・建物被害・橋脚被害・避難所の概況を調査しました。益城町では地表地面断層箇所約 2 m の横ずれを確認したほか、避難所として使用されている益城町総合体育館を視察しました。南阿蘇村では、東海大学阿蘇キャンパス周辺地域にて建物被害の概況調査及び山腹崩壊現場の視察を実施しました。西原村では、大切畑大橋の被害を調査したほか、周辺地区における建物被害の概況調査を実施しました。地震発生から 2 ヶ月が経過しますが、各市町村にて仮設住宅への案内が始まっている一方、倒壊家屋の撤去作業は地域によってその進捗に差が出てきているようです。



熊本大学教員との面談



熊本大学教員との面談



日本防災士会熊本県支部幹部との面談



地表地震断層箇所の調査（益城町）



建物被害の概況調査（南阿蘇村）



阿蘇大橋崩落箇所



大切畑大橋（西原村）



仮設住宅（西原村）